

11月16日グループ発表レジュメ  
みずきなつき班  
都市芸術 アングラ演劇の熱

## 1. はじめに

今回わたしたちは日本のアバンギャルドについて、演劇という方面からアプローチする。1960年から70年にかけての東京の都市には、詩人、アナキスト、私服刑事、街娼、党员など演劇実験室点状積敷という劇団をとりあげ、都市とのかかわりの中から彼らの奇跡をたどっていき、演劇というものに秘められた、私たちのまだ知らない力をさぐっていききたい。

※アングラ演劇…アンダーグラウンド演劇の略。60年代から70年代にかけて東京を中心に大きな盛り上がりをもせた前衛的な小劇場演劇のこと。

## 2. 新劇の存在～アングラ演劇以前の40年代～50年代

- ・能・狂言・歌舞伎など伝統演劇は「旧劇」…それに対しての「新劇」
  - ・終戦後、表現の自由が与えられることによって広がる
  - ・政治的アジテーションが含まれる
  - ・主に海外の作品をモチーフ
- ex.「フィガロの結婚」

## 3. アングラ演劇と都市の関係

<状況劇場>

- ・1963年、唐十郎を中心に結成
  - ・劇場ではなく、テント公演を行う…主に新宿花園神社、その他路上、公園等
- ex. 新宿西口中央公園事件

●60年代の新宿…学生や芸術家、フーテンなどが集まり、その溜まり場である喫茶店も多く存在。劇場なども多く、文化の拠点となる反面、西口では連日のフォーク集会が行われたり、でもが行われたり、未知数のエネルギーであふれていた。政治的なもの、文化的なもの、風俗的なものの混在している都市であった。

- ・当時の受けは賛否両論…内容はわけがわからない？
- ・メッセージのナンセンス化、出現の仕方、所作、相貌の異様さ、スキヤンダル性を有する

- ・表現者、観客の水平的な関係
- ・テキストよりも身体表現に重きを置く

・特権的肉体論…唐十郎による、演劇のなかの身体に対する考え  
「俳優の身振りとせりふの本質は、騙りである。つまり、あざぶくことによって観客をとらえる、作為の芸である。俳優は観客を騙るためには、まず自身の身体に対して、とぎすまされた鋭敏な身体感覚をきたえあげなくてはならない。その、細密な身体感覚に基づいてコントロールされた身体所作が、はじめて身体によって観客に語りかけることを可能とし、また観客を騙ることを可能とする。」  
→身体的重要性強調

#### <演劇実験室「天井桟敷」>

- ・1967年、寺山修司が結成
- ・創立メンバー：横尾忠則、東由多加、九條映子ら

#### ●「見世物芝居」の復権

ex. 代表作『大山デブ子の犯罪』(美術：横尾忠則)/『千一夜物語』(美術：宇野亜細喜良)

- ・当時のデザイン界の新星らがアングラ演劇の美術に腕を振るう
- 演劇が東京の文化の主要な位置を占めていた

#### ●演劇の箱から飛び出す—『30時間市街劇 ノック』70年代後半

ex. 1975年 杉並区で上演された連続30時間にも及ぶ「市街劇」  
「だれかに尾行されている 時刻表にないバスが走っている 戸別訪問してくる一人の俳優の悲劇」は引き受けるにあまりにも重大だ  
1m四方一時間国家を三十倍に拡大し新人演出家幻一馬が挑む新しい演劇の地平！」  
→観客も作品の中にエキストラとして巻き込まれてゆく

- ・天井桟敷は83年に寺山修司の逝去により解散
- ・演劇実験室「万有引力」
- 寺山修司の死後J. Aシーザーによって立ち上げられた

ちょっと一息…見てみよう！感じてみよう！

天井桟敷『人力飛行機ソロモン』

感想：

状況劇場『腰巻お仙・忘却編』

感想：

#### 4. アングラ演劇のその後…

- ・時代の熱を失った→都市の変化(新宿西口再開発等)・人の変化
- ・つかこうへいの出現→駄洒落の笑い文化
- ・アングラも古典として語られる
- ・商業演劇として演じられる唐作品

#### 5. 考察

今回中心に取り上げた「紅テント」や「市街劇」など、「ハコから飛び出した演劇」はアングラ演劇において重要な要素であった。実際、寺山修司の行った『ノック』では、観客やそれを見ていない人までも、作品の中に出現させてしまうなど、「市民社会」そのものを自分たちの紡ぎ出す物語の中に引き込んでしまったように思える。そうした時、1968年以降花開いた「新宿文化」に見られるような都市の持つ熱気や狂乱の様は、まさにその現場で行われていたアングラ演劇に少なからず影響を与えているのではないだろうか。

そこではわたしたちの想像した演劇というイメージを超えたものが存在しているようである。テレビや新聞では流せないような過激な内容を生身の人間を通して投影することによって、見る者は虚構のようで虚構ではない世界へといざなわれる。そこに演劇の生の力があるのではないだろうか。タブーとされることに触れる瞬間、ひとはなんらかの快感をおぼえてしまうのかもしれない。

都市が劇場になる演劇においては、時代の変化に伴って変容していく。その時代でなければやはりその魅了を完全に味わうことはできないのだ。いま感じ取れるのはニュアンスでしかなく、演劇のもつ一回性がさらに強調されることになる。それが演劇の魅力でもあり、欠点でもあるのだろう。